



文豪森鷗外と Teekanne とをつなぐものとは？



森鷗外五十歳の肖像画

表題の質問にさっそくお答えするならば、森鷗外（本名森林太郎、1862～1922年）はお茶を好んで飲むだけでなく、茶器を扱うように書物を大切に取り扱いました。ドイツに到着してすぐに、ライプツィヒの衛生学研究所で研究をはじめます。『独逸日記』明治18年（1885年）1月7日の項には、『日本茶の分析に着手す。』とあります。そしてベルリンを舞台にした小説『舞姫』（1890、ドイツ語版のタイトルは“Das Ballettmädchen”および“Die Tänzerin”）の主人公太田豊太郎のモデルの一人は、Teekanneの前身だった会社のはじめての日本人社員武島務でした。

これはドラマチックで長いお話ですが、ここでは短くまとめてご紹介します。若く知識の吸収に情熱を注ぐ日本人男性太田豊太郎と、ベルリン・ヴィクトリア座の踊子の間の悲しいこの恋の物語は、当時のアジアとヨーロッパのつながりの可能性を象徴的に表し、日本の近代文学のはじめとされています。『舞姫』は日本では多くの高校の授業で採用されています。日本の授業資料では太田豊太郎が森林太郎と同一人物で、エリスという愛人が実在したと紹介されています。

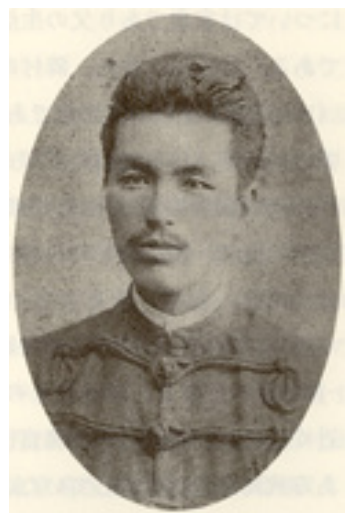
しかしこれに関しては様々な仮説があり、本物の証拠は未だ誰も発見し得ていません。またこの作品は私小説ではなく、フィクション作品であり、特定のモデルは存在しません。鷗外は作中の舞台や人物を色々な要素から形成し、多くは自身の経験からですが、知人友人の性格や、彼らのたどった運命も反映されています。

日本ではだれが本当の『舞姫』のエリスだったか、これまでいくつもテレビ番組が放送されてきました。ドイツでは反対に男性の登場人物太田豊太郎とそのモデルに関心が寄せられます。異なる文化圏での生活にオープンな心で、そして自己の責任でのぞむ日本の青年にシンパシーを感じるのです。

太田豊太郎のモデルの一人武島務（1863～1890年）を紹介しましょう。武島は鷗外より1歳年下で、1863年に埼玉県秩父郡太田村（現秩父市）で生まれました。『舞姫』の主人公太田豊太郎の名前は、この武島の出身地と、鷗外の本名林太郎の最初の文字を豊にかえたものです。彼の父は漢方医で、ちなみに彼の村の近くには日本で初めて帝王切開を行った有名な医師、伊古田純道が住んでいました。彼は武島の目標でした。務は父の医院を継ぐために1880年に東京の日本橋岡部病院での研修を始めます。

1882年に結婚し、同年と86年に子をもうけますが、ともに夭折してしまいます。東亜医学校での研修を終えた後、内科と外科の医師免許を取得します。この学校在学中の1882年から1883年にかけて森林太郎（鷗外）の生理学の講義に出席しています。これが鷗外と武島務の最初の出会いです。卒業後1883年軍医としての研修を始め、そこで再び鷗外の軍陣衛生学の講義に参加しています。1884年森林太郎はドイツに渡り、1888年まで医学研究を行います。武島も2年後の1886年、次男の夭折直後に渡独します。

1887年以降、武島は王立フリードリヒ・ヴィルヘルム大学（現フンボルト大学）のレヴィン教授のもとで研究します。シャリテからほど近いインヴァリーデン通りに下宿していました。同年4月には鷗外もベルリンに移り、ルーゼン通りとマリエン通りの角に下宿し、武島の下宿先から5分ほどの近い距離に住んでいました。



武島務



鷗外が官費留学できたのとは違い、武島は私費でベルリンに留学していました。武島の父は、息子に学資を送金することを東京に住んでいる娘婿（武島務の義兄）に頼み、お金を託します。というのも務の父は、振り込みの仕方を知らなかったためです。しかし娘婿（武島務の義兄）の中島清三郎はこの学資を使い込みます。父が送ったはずの学資はベルリンに届くことなく、こうして武島は経済的に苦しい状況に追い詰められていってしまいます。



1888年ベルリンの日本人留学生。左上：森鷗外、その隣武嶋務

金に困る日本人が外国には本国の恥と、武島は当時の駐在武官福島安正に決断を迫られます。政府から帰国費用を出してもらい日本に帰るか、それともドイツに残るか。ドイツに残ることは免官されることを意味しました。そう、『舞姫』の太田豊太郎のように。

武島は駐在武官の勧めに反し、ドイツに残り、学業を続け、ドイツで博士課程に進むことを決めます。学友であった森林太郎、北里柴三郎、亀井茲明、向井哲吉、多湖實敏、石黒忠憲は、武島に経済的援助を行い、1888年まではどうにかもちこたえていました。しかし1889年1月24日に武島は学業不熱心とされ学籍を喪失します。おそらく経済的困窮によって影響が出たものと思われます。『舞姫』の主人公が駐

在記者として働いていたように、当時の武島の収入源の一つは『中外医事新報』と『医事新聞』への寄稿でした。しかしこれも1889年1月5日の『医事新聞』への寄稿を最後に途絶えます。不幸なことと言うほかありません。

鷗外は愛すべき学友武島との交流とその悲劇的な運命を『独逸日記』のはしばしに書き残しています。

- 明治20年（1887年）4月21日 （前略）午後武島務を訪ふ。三等軍医なり。
- 明治20年（1887年）4月25日 警察署に至り、滞府の事を陳ず。（中略）夜武島誕辰の祝宴に赴く。
- 明治20年（1887年）6月30日 亀井子爵余に名刺一箇を贈る。余其胃病を療す。故に此贈あり。此日北里の曰く。武島務婦朝の命を受く。子之を知るや。日かつて聞けり。日島田輩の説く所に依れば、福島之谷口の讒を容れて此命を下しし者の若し。君の意何如。石黒の来るに遭はば、僕其の果して谷口を信ずるや否を見んと欲す。日君石黒に対して谷口の事を可否せんは乃ち不可なること莫らんや。日固より敢てせず。
- 明治20年（1887年）10月26日 武島務に逢ふ。かつて三等軍医たり。私費留学す。資金至らず。大に窮す。遂に將に戸主に訴へられんとす。福島之を聞いて婦朝を命ず。石君の至るや、命じて其職を辞せしむ。或は曰く。金に窮するは人々免れざる所なり。其離職に至るは、某の讒に由ると。果して然るや否。務性強梗屈せず。彼名倉幸作兒女態を作す比に非ず。言論慷慨愛す可し。

こうして武島は医学の道に戻るためにまず資金を蓄えなくてはならなくなりました。

おそらく輸入業での就職を探していたとき、取引先を日本まで拡大するためアジア人の従業員を捜していたドレスデンのR. Seelig & Hille（現Teekanne）にたどり着いたものと思われます。それまでドレスデンに何のつてもなかった武島がどのように、誰の仲介でそこに至ったかはいまだに解明されていません。森鷗外はドレスデン時代以来、特に日本に関心をもっていた軍医総監ヴィルヘルム・ロート教授等、ザクセンにはよいつながりをもっていました。どの程度鷗外が仲介にかかわっていたかは定かではありません。ともかく武島はベルリンからドレスデンに居を移します。



R. Seelig & Hille社は1882年に創立され、アジア諸国から当初家具等の物品を輸入し、その後茶葉も扱うようになり、主にドイツでこれらを販売していました。この会社は現在のプラーガー通りにありました。武島はリンデナウアー通りの外国人客用のゲストハウスに住んでいました。1888年はこの会社が“Teekanne”の登録商標を取得しただけではなく、日本人の従業員を得、後に大きな取引先となる日本に道を開いた転換の年でした。

1890年初頭、武島は肺結核にかかり、同年5月17日に27歳の若さでドレスデンの病院で亡くなります。鷗外はドレスデン滞在中ドレスデン・フリーデンシュタット病院を訪れ、「中国の間」の天井に施された装飾とそこに書かれた漢字を観賞しています。ドレスデンの人々はアウグスト王の時代から日本と中国の芸術の礼賛者でした。また病院の敷地にあるネプチューン（海神）像にも鷗外は深い感動を寄せています。

武島は入社したばかりの外国人であったにもかかわらず、R. Seelig & Hille社は死亡通知と葬儀の告知を地元紙に掲載しました。同社によって1890年5月20日に篤く埋葬され、ベルリン時代の友人であった亀井、向井、多湖が別れを偲んでドレスデンへ赴き、務の葬儀に参列しました。1888年9月にすでに帰国していた鷗外は、おそらく武島の死を『舞姫』の発行後に知ったと思われる。

武島の墓はドレスデン・フリーデンシュタットのマテウス教会の墓地にあったことが記録に残っています。住所はFriedrichstr. 43, 01067 Dresdenで、墓石のあった場所は、Flügel（翼部）G、Reihe（列）6、Grabstein（墓石）1でした。今そこは整地されて芝生になっていて墓石も残っていません。それでもなお秩父市長および秩父市民をはじめ、今でもたくさんの日本人がここを訪れています。

往時武島を懇意に世話した会社は今日世界的に有名な貿易企業となり、後にティーバッグ製造、またティーバッグ自動製造機の開発で広く知られるようになりました。今では世界中の多くの地域で“Teekanne”として知られており、日本では“ポンパドール”の名で親しまれています。

ベルリン森鷗外記念館

副館長 ベアーテ・ヴォンデ



ベルリン森鷗外記念館
Mori-Ôgai-Gedenkstätte
der Humboldt-Universität zu Berlin
Luisenstr. 39, 1. Stock
10117 Berlin

電話番号：+49 (0)30-2826097

開館時間：月～金曜日 午前10時～午後2時

SOU. POMPADOUR
c. s. v. o. m. h. i. e.
Dresden, den 17. Mai 1890.

Wir erfüllen hiermit die traurige Pflicht, den Tod unserer Angestellten

Tsutomu Takeshima

aus Saitama (Japan) anzuzeigen.
Der junge Japaner, dessen Treue und Anhänglichkeit wir stets in dankbarer Erinnerung behalten werden, erlag der Schwindsucht. Die Krankheit nahm einen so raschen Fortgang, dass der Wunsch des Hingeshiedenen, in sein Heimathland zurückzukehren, leider nicht mehr in Erfüllung gehen konnte.
Die Beerdigung findet Dienstag den 20. d. M., Vormittags 11 Uhr von der Halle des weißen Friedrichstädter Friedhofes aus statt.
Dresden den 19. Mai 1890.

R. Seelig & Hille.

出所) 同左。

わたしたちは、ここに、わが社員で埼玉（日本）出身の武島 務の死亡をご報告する悲痛な責務を果たします。若き日本人は、結核でなくなりましたが、その誠実と忠誠をわたしたちは、常になつかしく回想されましよう。
病状はかなり進行しており、故人の願いであった母国への帰国はかわいそうにも果たせませんでした。
葬儀は今日20日（火曜日）午前11時、フリードリッヒ町の墓地斎場から行われます。
ドレスデン、1890年5月19日
R.ゼーリッヒ&ヒレ

死亡告知記事



参照

平井孝「免官後の武島務 — 森鷗外『舞姫』詩と真実—」『鷗外』55号、森鷗外記念会、1994年、1～19頁。

金田昌司『地域再生と国際化への政策形成』中央大学出版部、2003年。

森鷗外『舞姫』集英社〈集英社文庫〉、1991年、2011年。

森鷗外『獨逸日記／小倉日記』森鷗外全集13、筑摩書房〈ちくま文庫〉、1996年。

山崎光夫「森鷗外と武島務（上）、（下）森鷗外と医学留学生たち 日本近代医学の源流第10回、11回」『大塚薬報』No.638、639、大塚製薬、2008年、46～49頁、38～41頁。

山崎光夫『明治二十一年六月三日』講談社、2012年。

写真提供

- 1) 「森鷗外五十歳の肖像画」 油絵 秋山清水画 1992年寄贈 ロンドン夏目漱石記念館にも秋山による漱石像が展示されている
- 2) 「武嶋務」 金田昌司、187ページ参照
- 3) 「1888年ベルリンの日本人留学生」 山根久代 ベルリン森鷗外記念館
- 4) 「死亡告知記事」 金田昌司、207ページ参照
- 5) 「ベルリン森鷗外記念館」 写真：ベアーテ・ヴォンデ

旧漢字について

インターネット上で文章を公開する際正しく表示されるよう、旧漢字を新漢字に修正し掲載しました。

また、「武島務」の漢字表記に関しては、インターネットその他の資料で「武島」と「武嶋」の2通りありますが、本稿では、鷗外の『独逸日記』および当時の内閣発行の書類（平井孝:2頁、3頁写真資料参照）により、「武島務」と表記しました。